

米国の 20 世紀初期における幼稚園の音楽教育に関する研究 —A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade を中心に—

井本 美穂

(本講座大学院博士課程後期在学)

Kindergarten Music Education in United States in the Early 20th Century: With a Focus on *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*

Miho IMOTO

Abstract

The purpose of this study is to clarify the characteristics of the music curriculum in *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*. This curriculum was established in the early 20th century when the U.S. kindergarten education was greatly changed. This curriculum had a significant influence on the kindergartens in those days. The characteristics of the music curriculum of the Conduct curriculum are as follows: 1. Setting a high value on children's self-motivation, and structured in order to motivate children to take action for music activities by themselves; 2. Introduction of instrumental activities and music appreciation, which was a new initiative at that time; 3. Emphasizing to use materials which are based on children's experiences; 4. Putting emphasis on developing children's social skills through various music activities; 5. Emphasizing to develop children's personality in music activities which fit their individual abilities. By investigating these characteristics, it became clear that the music curriculum of the Conduct Curriculum aimed to develop children's individuality in acquiring social skills through several music activities.

I. はじめに

19 世紀末から 20 世紀初期は、米国の幼稚園教育が大きく動いた時期である。米国の幼稚園は、1856 年に最初の幼稚園が創設されて以来、フレーベル主義幼稚園が主流となっていた。しかし 1890 年代から、フレーベル主義教育は恩物¹を用いた形式的・画一的な教育であるとの批判が生まれ、子どもの生活経験に基づいた教育が必要であるとする進歩主義幼稚園運動が繰り広げられた。その結果、幼稚園の教育内容に大きな変化が生まれた。恩物を中心とした活動から、子どもの実生活に基づいた活動に中心を置くようになったのである。こうした幼稚園教育の転換期において、幼稚園の音楽教育はどのような内容だったのであろうか。

本稿では、当時の米国における進歩主義幼稚園運動において重要な役割を果たしたヒル (Hill, Patty Smith, 1868-1946) が監修した幼稚園のカリキュラム *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade* (Hill, 1923) (『幼稚園と第一学年のコンダクト・カリキュラム』以下、コンダクトカリキュラム) に掲載されている音楽の項目を分析し、当時の幼稚園における音楽教育の内容を探る。ヒルは、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属幼稚園で、自由遊びと幼稚園教師の能力開発について実験および研究を進めた教育者である。ヒルは、附属幼稚園の教師と共同で行った実験をもとに、コンダクトカリキュラムを監修し、出版した。カリキュラムには、「音楽」が独立した項目として含まれている。ヒルは、幼稚園の歌集について記述した論文 (Hill, 1910) を執筆しており、武内 (2012) によりその内容が考察

されている。また、姉 (Hill, Mildred J.) と共に、『幼稚園のための歌集』(Hill, 1896) を編纂しており², 音楽への関心が高かったことがうかがえる。

コンダクトカリキュラムに関しては、様々な角度から研究が行われているが³, 音楽に関する研究はほとんど見られない。先行研究としては、山浦・中村 (2000, 2001) が、コンダクトカリキュラムの音楽の部分および、コンダクトカリキュラムの共同執筆者であるソーン (Thorn, Alice Green 1890-1942) によって書かれた *Music for Young Children* (Thorn, 1929) (以下、『幼児の音楽』)⁴ について、概要を紹介している。ソーン教育理念については後述する。山浦・中村は、コンダクトカリキュラムの音楽教育に関する部分が、『幼児の音楽』によって拡大・詳細化されたものとして位置づけられるとしている (山浦・中村 2000, p.41)。また、このカリキュラムが日本の幼稚園へ及ぼした影響という視点から、音楽の項目のうち、特筆すべきところを取り上げて考察している (山浦・中村, 2001, p.105)。しかし、音楽の項目全体の内容分析は行われていない。そこで本稿では、コンダクトカリキュラムの音楽の内容を『幼児の音楽』を手掛かりとしながら検討し、本カリキュラムにみられる音楽教育の特徴を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. コンダクトカリキュラム「音楽」の背景

1. コンダクトカリキュラム出版以前の幼稚園における音楽

コンダクトカリキュラムの特徴を検討するためには、このカリキュラムが出版される以前に、幼稚園でどのような音楽教育が行われていたのを知ることが必要であろう。しかし、当時の米国では、幼稚園の教育内容は各地域の教育委員会またはそれぞれの幼稚園で決められていたため、幼稚園での音楽教育の内容は様々であり、状況把握は難しい。そこで本論文では、希少な史料のなかから、コンダクトカリキュラム以前に発行された、各地域の指導書の音楽に関する項目の紹介を試みる。各々の発行元が異なるため、時系列的比較は不可能であり、これらの史料から米国全体の幼稚園の音楽教育事情を把握することは困難であるが、当時の状況の一端を知ることにはできるのではないかと考える。まず、1863年の指導書では、歌の指導方法が述べてある (Peabody, 1863)。歌は口頭で伝えられ、音階を認識するために、ドレミではなく 123 と数字を用いて指導するよう記述されている。1893年の指導書では、体の動きを伴って歌う、およびピアノに合わせて体操するという形で音楽が用いられている (Robinson, 1893)。1903年のニューヨーク市の指導書では、歌唱、および歌を用いたリズム感覚の習得が記述されている。年長になると、読譜による歌唱も導入されている (Board of Education of New York, 1903)。1913年の指導書では、リズムに対して身体を使って反応すること、音程を合わせて歌うことについて指導することが記載されている (New Jersey Public Schools, 1913)。1921年の指導書では、歌の暗唱、読譜に加えて、鑑賞について記述されている (Public school of Salt Lake City, 1921)。これらの指導書から、歌唱と、リズムに対して身体を動かす活動が推奨されていたことがわかる。また 1921年には、すでに音楽鑑賞が指導内容に含まれていることがわかる。次項では、コンダクトカリキュラムの音楽の内容を検討する前に、まずコンダクトカリキュラムがどういった意図で作られたかを把握する。

2. コンダクトカリキュラムの概要

コンダクトカリキュラムは、コロンビア大学附属ホーレスマン校の幼稚園と同初等学校の第1学年を対象として⁵, 1915年から1921年に行った実験成果をもとに、ヒルと同校および幼稚園の教師7名によって編纂されたカリキュラムである。実験では、教師は命令者であるよりも案内人であるとし、この考えにもとづいた教授の技術を生み出すことが試みられた。選択と決定は可能な限り子どもたちに委ねられ、自分で目的および計画をたて、実行することに重点が置かれた。子どもたちは相互に、自らの経験を通して学ぶ幅広い機会が与えられた (Hill, 1923, p.iv)。この幼稚園で子どもたちの変化を観察し、子どもたちの個人的・社会的行為の典型的な成果と考えられるものが記録されていった。それをもとに研究と実験が重ねられ、コンダクトカリキュラムとしてまとめられた。

コンダクトカリキュラムの特徴として、主に次の2点が挙げられる。

1) 集団内での責任性や協力性、公平性といった社会的・道徳的内容を重視している点。

一連の活動を通して、各分野の知識・技能の習得に加えて、自己抑制力や他者との協調性を獲得さ

せることを目標としている。そのため望まれる学習効果として、社会的・道徳的内容が多く記述されている。

- 2) それぞれの活動において子どもが自分で目標を設定し、活動を計画して実行することを重視している点。活動内容は、子どもが日常の遊びのなかから自然な形で選ぶものであると捉えられている。

カリキュラムの内容は、日常的な活動や手作業などの「仕事の時間」が基本に据えられ、そこから文化的な内容を含む多様な「他の活動」へと広がるよう編成されている。

音楽は「他の活動」のなかに含まれている。しかし、1日30分行われることになっており、全体の時間割のなかでみると、多くの時間を占めている。では次に、音楽の内容を検討していきたい。

Ⅲ. コンダクトカリキュラム「音楽」の内容

コンダクトカリキュラムの音楽の項目には、幼稚園における音楽教育の目的については明示されていない。しかし、『幼児の音楽』のヒルとソーンの序文から、彼女らが幼児教育における音楽についてどのような思想をもっていたのかを知ることができる。まず、ヒルの序文からみていきたい。

ヒルは、「音楽はすべての芸術のなかでも最も人間の心に訴えかけるとともに、身体にも影響を与えると思われる」(Thorn, 1923, p.ix)と述べ、人間の心身への影響力が強いことを示している。ヒルは特に、声のトーン的重要性を指摘している。子どもは、声のトーンから感情の状態を読み取る。トーンは話し言葉および歌声に影響を与えるため、幼稚園教員養成課程では、トーンを作り出す心理学および技術に十分な時間をかけるべきであると述べている。彼女はまた、子どもが自由に音遊びすることを妨げてはいけなと述べ、自発的な活動の重要性を強調している。さらにヒルは、「文学において、ホメロス、シェイクスピア、ミルトンを知らないや恥ずかしいように、大人になって、ベートーヴェン、ワーグナー、モーツァルト、チャイコフスキー、ショパンを知らないや恥ずかしいという日がくることを願っている」(Thorn, 1923, p.xv)と述べており、音楽を教養としてとらえている面がうかがえる。そして、大人になって、音楽鑑賞の能力を身につけることを目指すと述べている。

次に、ソーンの幼児音楽教育に対する考えを見ていきたい。ソーンは、「音と動きは子どもの生活で最も興味を持つ要素である」と述べている(Thorn, 1923, p.1)。また、子どもの音楽経験および音楽能力は様々であるため、教師と親は、すべての子どもを同じ型にはめて教えるべきではないと強調している。実験ですべての子どもを共通の音楽レベルで訓練すると、効果が低かったことを報告している。大切なのは、演奏をすることで音楽に興味を持ち、楽しさを味わうことであると述べている。また、「音楽の効用は、人の感情の要求に応じて、その人を明るくしたり、落ち着かせたり、刺激したり、元気づけたりすることである。すべての子どもは、音楽教育をとおして、現在および将来の生活において音楽の効用を作り出せるようにならなければならない」(Thorn, 1923, p.2)と述べ、音楽教育の目的が、生涯にわたって音楽を楽しむ力をつけるためのものであることを示している。

それでは、こうした考えのもとで作成されたカリキュラムは、どのような内容になっているのであろうか。

音楽は次の4分野に分類されている(表「コンダクトカリキュラムの内容」参照)。

1. 音楽に対するリズム的反応(身体の動きによって)
2. 音楽に対するリズム的反応(楽器によって)
3. 歌
4. 鑑賞

各分野では、まず「素材」が示され、それぞれの素材を用いて行う「代表的な活動」と、それを通して獲得する「思考・感情・行為の望ましい変化」が記述されている。

以下、各分野の内容を検討していくことにしたい。

コンダクトカリキュラム（音楽）の内容

1. 音楽に対するリズム的反応（身体の動きによって）	
素材	
<p>A. 使用する音楽は、次の原則をふまえて、あらゆる資料から選択する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 音楽の立場から見て最高の水準のもの 2. 形式および和声の単純なもの 3. 子どもの能力にみあった長さのもの 4. 様々な種類のもの—一次の表にあるような、子どもの行為を発達させることを目的として作られたもの <p>B. 年間に選ぶ音楽は、子どもの様子を見ながら必要に応じて難易度を上げていくこと。</p>	
代表的な活動	思考・感情・行為の望ましい変化
<ul style="list-style-type: none"> ・演奏された音楽に耳を傾ける。 ・身体のリズム的な動きによって音楽に自由に反応する。 ・様々な種類の音楽に対して個人としてもグループとしても反応する。例えば以下のもの： <ol style="list-style-type: none"> 1. 様々なリズムの音楽 <ul style="list-style-type: none"> 様々な音価および休符 強拍と弱拍 速度の差異—速い、遅い 2. 描写的な音楽 例えば、 <ul style="list-style-type: none"> 「勇敢な騎士」 シューマン 「真夏の夜の夢」メンデルスゾーン 「魔女」マクドウェル など 3. 明確な舞踊形式の音楽 例えば、 <ul style="list-style-type: none"> ガボット、メスエット など 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を注意深く聴くことができる。 ・運動制御能力を発達させる（バランスと安定感） ・各自音楽を認識し、リズム的に表現する： <ul style="list-style-type: none"> 速度の違い 強弱の違い 雰囲気の違い リズムパターンの違い ・大きなグループの中でも他人の邪魔をしないで遊ぶことができる。 ・援助の必要な子どもを快く助ける。 ・リズム反応を楽しむ。 ・舞踊形式について感じ始める。 <ul style="list-style-type: none"> 例えば、小さいグループまたは二人で組んで自然に踊る。
2. 音楽に対するリズム的反応（楽器によって）	
素材	
リズムのために	メロディのために
<ul style="list-style-type: none"> 太鼓 シンバル ガラガラ サンドペーパーブロック (訳注：紙やすり板等に張り付け、それを擦って音を出す) ベル トライアングル タンバリン 	<ul style="list-style-type: none"> トイピアノ（大、小）（訳注：玩具の卓上ピアノ） シロフォン チューバフォン（訳注：金属製パイプで作られた鍵盤打楽器） 水を注いだグラス
代表的な活動	思考・感情・行為の望ましい変化
<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に対してリズムカルに反応する。 <ol style="list-style-type: none"> (a) バンド用の楽器を使って <ul style="list-style-type: none"> 個人的に（ソロ） 小グループで（3人、4人） 大グループで（バンド） (b) 指揮することによって ・バンドの使用楽器の種類によって組み分けをする。 <ul style="list-style-type: none"> ベルとトライアングル シンバルと太鼓 タンバリン ガラガラとサンドペーパーブロック ・様々なタイプの音楽に反応する。 ・次の差異をしっかりと表現する。 <ul style="list-style-type: none"> 速さ 強弱 形式 (詳細は身体の動きによるリズム的な反応の項を参照) ・トイピアノ、シロフォン、チューバフォン、水を注いだグラスを用いる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器を使う楽しさ。 ・バンドの中で演奏する楽しさ。 ・次の事項についてある程度の規則を作り、それに従うことを学ぶ。 <ol style="list-style-type: none"> (a) バンドの組織 <ul style="list-style-type: none"> 楽器の持ち出しおよび後片付けを静かにする。 楽器を適切な持ち方で持つ。 始めるのもやめるのも、指揮者の合図を待つ。 演奏中も指揮者に注意している。 バンドの並びを保つ（半円形）。 同じ種類の楽器は一緒に並ぶ。 (b) 自分の好きな楽器でも他人と共に使用する。 <ul style="list-style-type: none"> 指揮も交代にする。 他人が演奏している時は聴く。 楽器を大切に扱わなければならないことを学び、実践する。 ・次のような楽器でメロディーを演奏することを学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> シロフォン、グラス、トイピアノ（身体の動きによるリズム的な反応の項参照）

3. 歌	
素材	
<p>子どもの歌う能力には差があるので、その能力に従ってグループに分けるのが、最も大切であると思われる。そのため、子どもの声の試験を、学年の始めおよび1年のうちに何回か行う。子どもは次の事項をもとに、グループに分ける。</p> <p>Bグループ：1つ2つの音は正確に合わせることができるが、長い連続した音を合わせることができない。</p> <p>Cグループ：単純な連続した音を明瞭に出すことができる。</p> <p>Aグループ：1つの音も正確に合わせることができない。</p> <p>歌の素材を選択する際は、これら3グループに必要なことを心に留めて、子どもの様々な能力に対して適切な素材を選ぶこと。歌の選択については、次の事項を考慮すること。</p>	
<p>歌詞： 思想においても表現においても、子どもらしいもの。 魅力的で興味をひくテーマ。 文学としての価値のあるもの。 短いもの。</p>	<p>音楽： 興味をひくもの。 歌詞に合ったもの。 形式の短いもの。 和声の単純なもの。 子どもの音域にあったもの。</p>
代表的な活動	思考・感情・行為の望ましい変化
<ul style="list-style-type: none"> 音で実験する。 シロフォン、グラス、トイピアノを用いる。 音と遊ぶ。例えば、 模倣ゲーム・ かくれた子どもの名前を呼ぶ 歌の創作（歌詞および曲） 歌う（一人またはグループで） <ol style="list-style-type: none"> 先生に習った歌 子どもが紹介した歌 様々な種類の歌 子守歌、ユーモアのある歌、抒情的な歌、季節の歌など 楽器で演奏された（ヴァイオリン、ピアノなど）歌、または子どものために歌われた歌を聴く。 トイピアノ、水を注いだコップなどの演奏に合わせて歌う。 他のグループのために歌をうたう。 (幼稚園および第1学年) 	<ul style="list-style-type: none"> 歌う楽しさ。 歌を聴くことの楽しさ。 歌を創作する楽しさ。 次の練習によって、歌う技術が進歩する。 軽い頭声を使うこと。 はっきりと発音すること。 音の高低を聞きわけること。 次の方法で上記の技術を習熟する。 一人で歌う。 音程を正しく合わせる。 楽器に合わせて正しい音程を出す。 正しい姿勢を学ぶ。 短い音楽の形式について、その概念を学ぶ。

4. 鑑賞	
素材	
<p>子どものためにピアノ、ヴァイオリン、オルガン、チャイムで演奏する音楽。 子どものために歌う音楽。 ヴィクトローラ（訳注：ビクター蓄音機会社が1906年に発売した蓄音機）で演奏された音楽。 (レコードの大半はコロムビア蓄音機会社で制作されたものを使用。これらは幼稚園および第一学年の受け持ち教師の会の会員の指示のもとに作られ、ヒル教授に承認されたものである) 音楽を鑑賞させることの目的は、子どもたちの音楽経験を増やし豊かにして、よい音楽を聴くことに興味をもたせることである。</p>	
代表的な活動	思考・感情・行為の望ましい変化
<ul style="list-style-type: none"> 音楽を聴く。 休み時間に ピアノの周囲にグループで集まって 短いコンサートやリサイタルを聴く。例えば、 歌、オルガンとチャイム、ヴァイオリン 様々な種類の音楽を聴く。 楽しい、賑やかな、悲しい、荘厳な、静かなものなど・ 子どもらしい経験を叙事的、説明的に取り扱ったもの 例えば、 「こどもの生活」クラク 「こどものためのアルバム」シューマン 音楽に対して自分で独創的な解釈をし、それを描写的動作で表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 美しい音楽を聴く楽しさ。 次のことを学ぶ。 様々な音楽の種類を認識する。 オーケストラの演奏を聴いて、様々な楽器（ヴァイオリン、フルート、ホルン、太鼓）の違いを認識する。 数種類の曲の曲名を覚える。 静かに注意して聴く。 レコードを使用して、作曲家の名前に親しみを覚える（第1学年）。 ある種類の音楽を認識し、その雰囲気表現する能力を得る。

(Hill, 1923, pp.58-63. より作成)

1. 音楽に対するリズム的反応（身体の動きによって）

リズム的反応について、『幼児と音楽』では、身体の動きと楽器による動きに分けず、「リズム活動」としてまとめられている。リズム教育の目的は、①リズム活動をとおして、子どもの興味を促進する、②リ

リズム活動を考えることで、子どもが動きをコントロールできるようにする、③リズム遊びは、創造的な自己表現の形として満足感を得られる活動であることを認識させる、④リズム遊びをすることで、今後の音楽および詩の学習に必要な基礎を身につける、⑤グループ経験をとおして、必要な社会的習慣を身につけさせる、となっている(Thorn, 1929, pp.62-63)。

身体の動きによってリズムに反応することは、すでに1893年の指導書にもみられ、新しい項目ではない。しかし、このカリキュラムで特徴的なことは、身体のリズミ的な動きによって音楽に「自由に反応する」、小さいグループまたは2人で組んで「自然に踊る」と、身体の動きを子どもの自由に任せている点である。それまでの指導書では、音楽に合わせて教師の決めた動き(手をたたき、足をならす、スキップをする、決められた型の体操をするなど)をするという形であった。『幼児の音楽』では、「子どもは、音楽についての自分の考えに基づいて行動する機会をもつことが必要である」と述べられている。「音楽教育は、子どもが自分で考え、行動することを学ぶ発達プロセスであるべきである。そして音楽教育は、感情的な経験であるとともに、知的な経験でなければならない」としている(Thorn, 1929, p.81)。こうした記述は、子どもの自発的な活動を基本とするこのカリキュラムの理念を反映したものと考えられる。

2. 音楽に対するリズム的反応(楽器によって)

「楽器を使用してリズム的に反応する」ことは、当時の幼稚園では新しい発想であったと考えられる。音楽に対してリズム的に反応することについては、以前からゲームなどを通して行われていた。しかし、楽器を用い、バンドを作って演奏するという内容は含まれていなかった。ヒルは、「音楽遊びをするには素朴な様式が大変望ましい」と、シンプルな楽器の使用を奨励している(Thorn, 1929, p.xii)。同時代のホーレスマン校の初等・中等学校でも、「器楽演奏」はまだ課外活動として扱われており(荒巻, 2001, p.240)、シンプルな楽器とはいえ、集団で楽器を使用することは、初等・中等学校に先駆けて試みられた新しい活動であったと推測される。楽器がそろえられない場合は、遠足の形で、園児を連れて楽器店に見学に行くことも1つの方法として記述されており(Thorn, 1929, p.152)、新しい活動であるがゆえに、代替方法も提示する必要があったことがうかがえる。また、「思考・感情・行為の望ましい変化」の項目に、集団内での自己抑制力や他者との協調性に関する内容が特に多いことに気づく。先に述べたように、グループ経験をとおして、社会的習慣を獲得することに重点がおかれていることがわかる。

3. 歌

歌については、かなり力を入れて説明が行われている。「歌を歌うことは、人生のなかで最も楽しい体験である。歌をとおして感情を表現することは、すべての人が楽しむことができる経験である。子どもたちは、人生を豊かにするために、歌う能力を得る手助けを受けなければならない」と述べられている(Thorn, 1929, p.6)。歌を歌うことで得られる事項として、①楽しさを味わうことで、心身の健康を促進する、②グループのなかで歌うことで一体感を味わうなど、社会的価値をもつ、③自己表現の媒体となる、ことが挙げられている。また、歌う技術として、自分の声のトーンと息遣いをコントロールできるようになることが重要であるとしている。歌の項目で特徴的な点は、子どもの歌唱能力に応じてグループ分けをすることである。グループ分けの基準は、音を正確に合わせることができることである。『幼児の音楽』には、グループ分けのための「音高識別テスト」の方法が記載されている(Thorn, 1929, pp.39-41)。テストにはピッチパイプを用い、カリキュラムに記載されている3段階で評価している。また、歌う歌は、「子どもらしいもの」でなければならないとしている。ここでいう「子どもらしい歌」とは、「子どもたちの経験や感情を表現したもの」である。感傷的、象徴的、大人の心情を表した歌は用いるべきではないと述べられている。例として「かっこう時計の歌」を歌う際の方法が示されている。まず「かっこう時計」を子どもたちに見せる。かっこう時計のかっこうが鳴く(音を出す)のを聴いて、子どもたちはその音を真似しはじめる。その後、「かっこう時計の歌」を教えると、子どもたちはすでに経験したことのある内容なので、興味をもって歌に取り組む。この例のように、子どもの経験に即した内容の曲を選択することが強調されている。そして、発達段階に応じて適切な教材を選ぶことができるよう、教員養成教育をしっかりする必要が示されている。また「音で実験する」「音と遊ぶ」「歌の創作」など、音を用いて子ども自身に音楽を作らせることを試みている。これは、コンダクトカリキュラム全体を通して重視され

ている「創造的な活動」が反映されたものと思われる。

4. 鑑賞

鑑賞を通して得られる事項は、①音楽に対して新しい興味が増す、②音楽が提供できる最高のものを子どもに与えて、音楽の趣向を作る、③音楽の様々な面を知らせる、④すべての子どもが、自分のレベルに合わせて参加できる経験を提供することである、と記述されている（Thorn, 1929, p.136）。

鑑賞においても、「単純で子どもらしい」曲を選択することが大切であると強調されている。芸術的であっても、複雑で高度であると子どもが興味を持たないと述べている。また、聴いた音楽について、教師が内容を説明する前に、まず子どもが自分の考えを創造する機会を与えることが必要であるとしている。また、「数種類の曲名をおぼえる」「作曲家の名前に親しみを覚える」などの項目があり、先に述べた、音楽を教養としてとらえている面が反映されている。

IV. まとめ

コンダクトカリキュラムにおける音楽の特徴は、以下にまとめることができる。まず、子どもの自発性を重視している点である。リズムに自由に反応する、音で遊ぶなどの活動にみられるように、子どもが自分自身で考えて音楽を表現し、音楽を楽しむ態度を養うことが目指されている。次に、楽器を用いた表現活動が導入されている点である。この活動は、当時においては新しい試みであり、その後の幼稚園における音楽教育に大きく影響を与えたと考えられる。さらに、音楽鑑賞が項目として加えられ、子どもたちの音楽経験を増やし豊かにすることが目指されている点も、注目に値する。また、用いる音楽は、子どもの経験および発達段階に即した、表情豊かでありかつ単純な曲であることが強調されており、経験に基づく学習を重視しているこのカリキュラムの理念が反映されているといえよう。一方、社会性の獲得という面からこのカリキュラムを見た場合、各活動の違った役割が浮き彫りになってくる。歌は、人間のコミュニケーションに重要である声のトーンをコントロールする訓練として、位置づけられる。歌や器楽バンドでのグループ活動は、子どもの社会的な習慣形成をする場として活用される。このように、様々な音楽活動をとおして、子どもが「社会性」を身につけるよう構成されている。また、歌う際に能力別に分けるなど、個人の能力にあった活動を行うことが強調されており、個性を伸ばすことに重点がおかれていることがわかる。「子どもは、音楽についての自分の考えに基づいて行動する機会をもつことが必要である」（Thorn 1929, p.81）との記述からも、1人1人の考えを尊重する姿勢がみられる。以上から、コンダクトカリキュラムにおける音楽教育は、社会性を身につけながら、かつ個性を伸ばすことを目指したものであったといえよう。

今後は、コンダクトカリキュラム出版前後の、幼稚園における音楽教育内容の詳細を把握し、米国の幼稚園の音楽教育においてこのカリキュラムが果たした役割を明らかにしたい。

【注】

- 1 幼稚園の創始者フレーベルが1830年代に考案製作した一連の教育的遊具。ドイツ語 Gaben の訳語で、神から授けられたものという意味の語であり、フレーベルの独自の宗教的世界観と、子どもの自己活動的な遊びを重視する教育思想とに深く結びついている。
- 2 誕生日にうたう歌として親しまれている“Happy Birthday to You”の原曲（原題は“Good Morning to All”）は、ヒル姉妹によって生み出された歌であり、この曲集に収録されている。
- 3 坂田（1973）、杉浦（1996、2000）、滝沢（1996）、橋川（1998）などがある。
- 4 著者であるソーンは、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属幼稚園の教諭を務めており、コンダクトカリキュラムの執筆者の1人である。『幼児の音楽』は表題の前に「幼児教育シリーズ」パティ・スミス・ヒル監修との記載があり、コンダクトカリキュラムの叢書であることが示されている。また序文をヒルが書いている。内容は、ヒルの序文に続いてソーンの序文があり、「歌うこと」「リズム活動」「楽器の使用」「コンサートと音楽の遠足」に項目が分けられている。それぞれの項目では、活動の目的・内容・指導上の注意点が具体的に記載されている。彼女は、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属幼稚園および他の赴任先での実践経験の成果として『幼児の音楽』を書いたと述べている（Thorn,

1929, Preface)。このことから本書は、コンダクトカリキュラム「音楽」の具体的な実践事例を示したものと捉えることができる。

- 5 この幼稚園に通う園児たちは、中流の家庭に育ち、父親は教師、法律家、医者が多かった。人種としては、大多数は米国人で、英国人、フランス人、日本人、ロシア人が少数含まれていた。(Hill, 1923, pp.1-2.) このことから、対象となった幼児たちは比較的経済的に恵まれていたとみられる。

【引用・主要参考文献】

- ・阿部真知子, 別府愛, 滝沢和彦, 菅野文彦, W. H. キルパトリック他 (1988) 『アメリカの幼稚園運動』 明治図書.
- ・荒巻治美 (2001) 『アメリカ音楽教育成立史研究』 風間書房.
- ・Board of Education of New York (1903) *Course of Study in Kindergarten Music Physical Training*, Department of Education, the City of New York.
- ・Robinson, B. (1893) *The Kindergarten Practice for the Use of Teachers*, Marcus Ward & Co., Limited.
- ・橋川喜美代 (1998) 「保育形態論の確立とコンダクト・カリキュラム—わが国に見る P.S. ヒルの生活形態論の影響について—」 『カリキュラム研究』 第7号, pp.39-51.
- ・Hill, Mildred J., Hill, Patty S. (1896) *Songs Stories for the Kindergarten*, Chicago, Clayton F. Summy.
- ・Hill, Patty Smith (1910) “The History of the Kindergarten Song in America”, *Kindergarten review*, 21(4), pp.193-206.
- ・Hill, Patty Smith (edit.) (1923) *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*, Charles Scribner S Sons.
- ・New Jersey Public Schools (1913) *Curriculum for the Kindergarten and Primary Grades*, Press of Shaner & Knauer.
- ・Peabody, Mary T., Peabody, Elizabeth P. (1863) *Moral Culture of Infancy, and Kindergarten Guide*, T.O.H.P. Burnham.
- ・Public school of Salt Lake City (1921) *Course of Study Kindergarten Music Art - 1921 -*, Salt Lake City, UTAH.
- ・坂田嘉郎 (1973) 「アメリカ幼稚園運動におけるプログレッシブ幼児教育論—P.S. ヒルを中心として」 『聖和女子大学論集』 第3号, pp.35-51.
- ・杉浦英樹 (1996) 「プロジェクト法の源流 (1): コロンビア大学附属スペイヤー校の幼稚園カリキュラムと P.S. ヒル」 『上越教育大学研究紀要』 16(1), pp.139-159.
- ・杉浦英樹 (2000) 「プロジェクト法の源流 (2): コロンビア大学附属ホーレスマン校と『コンダクトカリキュラム』」 『上越教育大学研究紀要』 19(2), pp.631-651.
- ・武内裕明 (2009) 「19世紀後期の米国における幼稚園音楽教育の発展—1880年代の幼稚園用の本を手がかりとして—」 『広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要』 XXI, pp.27-36.
- ・武内裕明 (2012) 「米国における幼稚園用の歌の本の発展の意義—20世紀初頭の Vandewalker と Hill の見解の比較を通じて—」 『広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要』 XXIV, pp.31-38.
- ・滝沢和彦 (1986) 「『コンダクト・カリキュラム』における「習慣形成」—「社会的適法」としての道徳教育—」 『教育と教育思想』 第7号, pp.14-22.
- ・Teachers College Columbia University (1923) *Teachers College School of Education Announcement 1922-1923*, Teachers College Columbia University.
- ・Thorn, Alice Green, (1929) *Music for Young Children*, Charles Scribner S Sons.
- ・山浦菊子, 中村千晶 (2000) 「幼児の歌う活動に関する一考察 その4の1—本学でなされてきた音楽教育について—」 『聖和大学論集』 第28号, pp.39-51.
- ・山浦菊子, 中村千晶 (2001) 「幼児の歌う活動に関する一考察 その4の2—2つのコンダクトカリキュラムを通して—」 『聖和大学論集 教育学系』 第29号, pp.95-108.